「国語教育研究」第六十三号（令和四年三月刊）

小説単元の編成に関する実践的研究

――川上弘美「草上の昼食」の教材化のために――

玉木雅己

一　はじめに

論者（玉木）は、２０２０年度上半期に、川上弘美「神様」「神様２０１１」を教材とする小説単元学習を行った。この自主単元では、学習者が他者の読みに触れ自己の読みを更新し、その到達点を文章化する授業を続けた。玉木（２０２１）はその実践報告である。

２０２０年度の下半期には、川上弘美「草上の昼食」と「おめでとう」を教材とする自主単元学習を行った。この二小説は、それぞれ「神様」と関連性を持つ作品である。

本稿では、次の三点を検討する。

①学習者は、「草上の昼食」をどのように理解したのか。

②「草上の昼食」を用いて、どんな小説単元が編成できるか。

③学習者は、１年間の小説単元学習を通して何を考えたのか。

「おめでとう」については、論者の作品理解と、学習者の読み取りが乖離する面があった。それゆえ、「おめでとう」の実践は、教材（研究）論の観点から別稿をまとめることにする。

二　使用教材　川上弘美「草上の昼食」

（一）書誌的情報

単行本『神様』（中央公論社　１９９８）は、短編小説９編を収録する（以下、作品名と区別するために、単行本は『神様』と記す）。「神様」は、「ＧＱ」（１９９４年７月号）に掲載された。その他の８編は、３年後に「マリ・クレール」（１９９７年11月号～１９９８年６月号）に連載された。「草上の昼食」は１９９８年６月号に発表された。掲載誌２誌は中央公論社刊、同新社は１９９９年設立である。

「草上の昼食」は約６４５０字である。「神様」（約３６００字）の１・８倍の分量とはいえ、一般的な分類では短編小説となろう。

「草上の昼食」に対しては、「神様」の授業での活用をという提案がしばしば行われている（これまで教科書に収録されたことは無い）。たとえば、吉岡（２００５）は、「『神様』を授業で読ませたのであれば、この作品を是非生徒に読ませたい」「『草上の昼食』は、『神様』の読みを深めることができる作品である」75と指摘する。

残念ながら、「草上の昼食」の授業記録は、現時点では未見である。渡辺（２０１７）は、「教科書には「神様」しか掲載されていませんが、月曜日からは「草上の昼食」も併せて読みつつひとつのお話として、考えさせてみたい」と授業内容の予告を行っている。実際にどのような授業が行われたのかは不明である。

（二）作品内容

「草上の昼食」の冒頭部は「くまにさそわれて、ひさしぶりに散歩に出る。／くまにはあいかわらず名前がない。」である（以下、引用部中の「／」は原典では改行されていることを示す）。この記述から、「草上の昼食」は「神様」の続編であることが明かである。

先行研究では、「草上の昼食」は、「神様」の作品論のための関連資料・補強材料として利用されることが一般的である。「草上の昼食」単独で論じられることはほぼない。

この作品の登場人物は、「わたし」と「くま」だけである。「神様」の親子連れや、「神様２０１１」の男の二人連れのような「くま」への悪意を感じさせる人物は現れない。

「草上の昼食」の本文は、1行空きで5つの部分に分けられている。便宜上、Ⅰ～Ⅴと表す。それぞれの概要は次のとおりである。

Ⅰ「わたし」は「くま」に誘われ久しぶりに散歩に出かける。

Ⅱ「くま」は、穴場の草原で、9種類もの料理を「わたし」にふるまう。「わたし」は、料理と赤ワインを堪能する。

Ⅲ「くま」は「わたし」に帰郷の決意を告げる。とまどう「わたし」は理由を尋ねる。天候は悪化し、雷雨の中で「くま」は何回も吠える。「わたし」は、その姿に恐れを感じる。

Ⅳ天候回復後、「わたし」は、「くま」に「熊の神様」について尋ね、人と熊は違うことを認識する。「くま」は「わたし」に、故郷に帰ったら手紙を書くことを約束する。

Ⅴ「くま」から絵と手紙が届く。絵を見た後「わたし」は三回読み返して泣く。返事を書くが、宛先が分からず机の奥に仕舞ったままになる。「わたし」は熊と人の神様に祈って眠る。

時間の経過に着目すると、これらは、Ⅰ～ⅣとⅤの二つのグループに分けられよう。両方とも、半日程度の短い時間の出来事である。Ⅰ～Ⅳの季節は、「雲雀」や「たんぽぽ」等から春だと分かる。Ⅴは、「夏になったころだったか」と明記されている。Ⅲの「雷」は、夏の激しい夕立ではなく、春雷ということになる。

ところで、「草上の昼食」は、19世紀のフランスの画家マネの代表作の題名でもある。この作品は、当時の画壇を刺激した。モネ、セザンヌ、ピカソも、マネを意識した同名の作品を発表している。

本小説の題名は、これらの絵画作品を意識したものなのかどうか。この点については、作者自身の説明や研究者の考証等は発見できていない。ただ、草原に敷物を広げ、ワインと豪華な料理が並ぶⅡの情景は、モネ作の「草上の昼食」の構図を思い出させる。

三　授業計画の概要

本単元は、上半期と同じ2年生の2クラス（計82名）で、「現代文B」の授業の隙間時間を利用して実施した。

基本的な授業展開は上半期と同様である。先ず、ペアで作品を音読した。その後、学習課題（A4版ワークシート1枚程度）に取り組んだ。その際には、他の生徒から聞き取った内容をふまえて、自分の考えを書き込んで共有した。論者は、今回も進行役に徹した。

毎時間、「草上の昼食」や「おめでとう」だけでなく、「神様」の本文も準備し常に参照できるようにした。

冬・年末　［2時間］

1時間目は、「草上の昼食」の前半部だけを、学習者に配布した。①題名読み、②「わたし」と「くま」の人物像や関係の、「神様」からの変化の把握、③作品後半部の展開の予想等を行った。

2時間目は、作品全編の本文を提示した。④全体の感想、⑤前・後半の「くま」の変化、⑥「わたし」が泣いた理由、⑦題名に「神様」という言葉が使われていない理由、⑧「神様」の次に読むのは、「草上の昼食」と「神様2011」のどちらが良いか等の各点を考えた。時間の関係からクラスによって取り組む課題を若干変更した。

新春・一月　［1時間］

年明けの最初の授業で、「おめでとう」を読んだ。①作品の舞台、②登場人物の人物像、③作品の中の「神様」の不在の理由等について検討を行った。

年度末・三月　再びの春に向けて　［3時間］

年度末・三月は、「おめでとう」について改めて考えた。①作品内の時間・舞台の設定意図、②「おめでとう」と「神様」の登場人物の関係について再検討した。

最後に、③1年間の単元学習全体の振り返りを行った。

四　学習者の読みの実態

（一）「草上の昼食」の作品世界の特徴

「神様」の本文は、読み手に多様な解釈を誘発する。先行研究でも、正反対のものを含めて様々な解釈が行われている。学習者達も、前稿で紹介したように、作品の世界を豊かに読み広げていた。

この点について、加藤（2004）は次のように述べている。

> 作者の「つもり」が見えない。まっしろ。「つもり」（意図）のところが読者の目に不透明になって現れる。これがこの小説の魅力、まったくこれまでにない新しさなのです。67
>
> 「神様」の強さは、ですからどのような意味にも着地しないその宙ぶらりんの強さです。この小説は、どのような意味にも着地したくない、という書き手の意志を強く感じさせることで、新しい時代の到来を告げているのです。76

「草上の昼食」は、「神様」の特徴である「不透明」さが薄れていく作品だと性格付けられる。「不透明」さとは、解釈の幅が広いことだと理解できる。「神様」では未だ「宙ぶらりん」な状態であったいくつかの点について、「草上の昼食」は着地点を提示していく。

このような「草上の昼食」を学習者はどのように読み取ったのか。本章では、冬・年末②～⑧の記述内容を研究資料として検討する。

（二）人間社会で暮らす「くま」の生きづらさ

「神様」の「くま」は、「わたし」から「昔気質・大時代・何から何まで行き届いた」と評される。時に野生を感じさせる言動はあるものの、本音を隠したような礼儀正しさは変わらない。

「草上の昼食」後半部で、「くま」は、「神様」では隠していた本心を「わたし」に告白する。この内心の吐露によって、「くま」の不透明さは薄れていく。

大原（２０１６）は、「くま」について次のように指摘している。

当たり前のことのように人語を操り、人間の生活習慣を繊細に学び取ったとしても、だからと言って人間と動物の間の境界線が無化されることにはならないのである。

こうした境界線の問題は、続編「草上の昼食」の方では、より切実なものとして描かれることになる。〈中略・論者〉「くま」が人間社会に順応するほどに、人間と動物との間の境界線を意識させられるのである。8

荒木（２０１１）の副題―「くま」の生きづらさを通して見えてくるもの―を借りれば、「くま」は、人間社会の生きづらさに耐え切れず故郷へ帰るわけである。

学習者は、作品の後半部を手がかりにして、「くま」の内面について、次のように述べている。

「くまは料理上手で気配りができる完璧な性格だと思っていたが、「合わせられなくなった」とか「魚の皮を食べる夢をみた」という発言からずっと合わせるのに必死だったのだと思った」

「「くま」は自分が人間社会になじめなかったことへの劣等感を感じている」

逆に言えば、作品の前半部は、「くま」の隠れた内面を探るために、本文を注意深く読むための教材となりうると考えられる。

冬・年末の第1時では、③「わたし」に、「くま」はどんな言葉をかけようとしていたのかを考えた。

最も多かったのは、「くま」が「わたし」に子守歌を歌おうかと提案するというものである（23人）。これは、「神様」で、昼食後の子守歌を「わたし」に遠慮されたことをふまえたものと思われる。

また、「くま」が「わたし」への好意を告白するという意見も、同数存する（23人）。恋愛感情には至らなくても、「わたし」に対する労いの言葉を予想する者も少なくない（11人）。

食事後に酔って微睡み「くま」に寄りかかっている。そんな場面であるため、「神様」より心理的な距離が近付いているだろうと、学習者が考えるのも自然なことだろう。一つのクラスでは、ペアでの音読の際に、豪華な昼食メニューの羅列的な紹介や鍼の話あたりで、その和やかすぎる話題に既に笑い声が漏れていた。

ところが、もう一つのクラスでは、③に対して次のような別れの言葉を予想する者が約1／4存した（10人）。

「なぜ優しく接してくれたの？　みんなは冷たいのに」

「あの散歩以来人間と関わってきたが、みんな冷たかったからもう一度楽しかった散歩をしたかった。」

前半部から、ストーリーの暗転を予測するのは、それほど簡単で

はない。「この話がこんなに悲しい方向に向かうとは」「くまは帰らずにずっと人間界で生きていくんだと思っていた」等、後半部まで読み進めて驚いたというのが一般的な反応だろう。仲間と読むことによって、帰郷の話題、過度に豪華な昼食、天候等を伏線として受け止め、悲劇の始まりを感じ取ることができたと考えられようか。

(三)「神様」の内実

ア 〈神様〉に関する記述の内容

「神様」の最後に、「わたし」は、眠る前に「熊の神とはどのようなものか、想像してみたが、見当がつかなかった」と語る。

「草上の昼食」では、Ⅲの雷雨の場面で「くまは、わたしの存在をすっかり忘れたように、神々しいような様子で、獣の声をあげつづけた」と描写される(傍線・論者)。雷雨とともに叫び続ける姿は、「熊の神様」の野性的なイメージを読み手に強く抱かせる。

その他にも、「草上の昼食」には、〈神様〉を想像する糸口になる記述が2カ所認められる(以下、作品名と区別するために、神様そのものを表す際には〈神様〉と記す)。

一つは、Ⅳの「わたし」と「くま」の対話である。「わたし」は、「熊の神様って、どんな神様なの。」と質問する。それに対して、「くま」は、次の傍線部のように、人や熊と、それぞれの〈神様〉の外見が似ていると答える(傍線・論者)。

「熊の神様はね、熊に似たものですよ」くまは少しずつ目を閉じながら答えた。/なるほど。

「人の神様は人に似たものでしょう」/そうね。

「人と熊は違うものなんですね」目を閉じきると、くまはそっと言った。/違うのね、きっと。くまの吠える声を思い出しながら、わたしもそっと言った。

もう一つは、Ⅴの最後の部分である。先ほどの「神様」からの引用部に呼応するように、「わたし」は、「寝床で、眠りに入る前に熊の神様にお祈りをした。人の神様にも少しお祈りをした」と語る。ここでは、「わたし」も、〈神様〉が、それぞれの種に独自に存在するものだと認識している。

イ 「題名」という観点

「ア」で見てきたように、「草上の昼食」は、絶対的な存在である〈神様〉の本質を解明してはいない。先の対話中の「くま」の言葉は、〈神様〉の説明と言うよりは、「境界線」の存在を納得するために繰り返されているように感じられる。「わたし」が「くまの吠える声」を想起したことも、両者の違いを裏打ちしていよう。

そこで、冬・年末では、⑦なぜ題名に神様という言葉が使われていないのかという角度から、〈神様〉について考えることとした。

学習者の意見は、二つに整理できた。

一つは、〈神様〉の存在意義が変化したというものである。

「前作での神様という存在は、ぼんやりとしていてどんなものか分からず〈中略・論者〉、今作ではっきりと、熊と人間は違うと断言されたことで、神様という言葉は前作と意味が変わってしまうため使わなかった」

さらには、「もともと、神様として存在しているクマを描いた物語だったが、そのクマにも寿命がきて、神様として存在できなくなっ

てしまった」等、「くま」=「神」という見方からの意見もいくらか出された。

もう一つは、次のように作者がこの作品で描きたかったことと関係が薄いという意見である。

「「草上の昼食」では「くま」の神様のことよりも、「くま」自身のこと、「くま」とすごした時間のことを考えている」

「「わたし」の前では出来るだけ人間らしくしようとした「くま」を、題名でくらい人間らしく表したかったから」

学習者の意見は、本文からだけでは〈神様〉について、深く掘り下げていくのは難しいことを感じさせる。

(四)「わたし」と「くま」の関係性

学習者は、「わたし」の人物像に関して、次に示すような「神様」からの変化を認めている。

「「わたし」の感情がわかるようになった。「神様」では無口で無表情だった。「草上の昼食」では笑ったり泣いたり感情豊かになっている」

「冷静というよりも、口ベタなだけで可愛らしい。そんな風に、「わたし」のイメージが少し変わった」

「「わたし」が「くま」をひきとめていたことに驚いた。」

「最後に泣いているのが人間味を感じてびっくりした」。

吉岡(2005)は、このような学習者達の見方とは異なった評価を下す。吉岡は、「神様」を、「「くま」と散歩をしたのにもかかわらず、何の変化も起きなかった「わたし」の物語」75だと性格付ける。「草上の昼食」も同じだとして、次のように指摘する。

「わたし」は、「くま」と久しぶりに「散歩」に行き、「くま」の帰郷のことを聞かされたり、雷雨にあったりと、物語に多少の起伏はあるにはある。だが、この作品も、「わたし」が淡々と非日常を受けて入れていくだけの物語なのである。75

「わたし」の人物像の変化の有無を検討することは、学習者の読みを活性化する可能性を持とう。「わたし」の人物像は、「草上の昼食」でも、まだ「不透明」さが残る。特に、Ⅴの行動(「くま」の手紙を読んだ後の涙、出せなかった手紙、熊と人間の神様への祈り等)は、語り手による意味付けが行われていない。これらをどう考えていくのかという点は、読み深めの契機になろう。

あわせて、「わたし」と「くま」の関係性も、読み深めていくための観点となると考えられる。

この点については、学習者には、「人間界に慣れようとする「くま」と、「くま」に慣れようとする「わたし」のすれ違いが切ない」等、二人の間の壁を感じる者が多い。

ただ、これについては、「境界線」の存在というよりも、お互いを思い合う心ゆえだというとらえ方も認められる。

「「わたし」は、別れをすなおに受け入れて大人な人。「わたし」は別れたくないが、「くま」の気持ちもわかる。「くま」の気持ちも尊重している。一方、「わたし」に危害を与えるくらい獣化する前に安らかに別れたかった「くま」」。

「「わたし」は、もともと人付き合いが少ないので独りになることは悲しくないが、「くま」のつらさを思ってありのままの「くま」と会いたかった」

二人は、わかりあえているのかという点は、授業の中でも、さらに深く掘り下げていく必要があったと考える。

五　単元編成の構想

（一）「神様」「神様２０１１」「草上の昼食」による小説単元

「神様」「神様２０１１」「草上の昼食」の3作品の小説単元では、「神様」から読み始めるのが自然である。その次の教材に関しては、後日譚の「草上の昼食」に進む、パラレルワールドの「神様２０１１」に進む、という両方のパターンが考えられる。

冬・年末では、⑧「神様」の次に読む作品として、どちらを選ぶかを考えた。結果として、学習者の9割が「草上の昼食」を選んだ。

「「神様２０１１」の方は制限もあり、生き方がある程度定められている世界。「草上の昼食」は、ピクニックが普通にできて、ちゃんと別れを伝えられているので良い。自分だったら、「神様２０１１」よりも「草上の昼食」のような生き方をしたい」

「熊の神様について、「わたし」の中で疑問が解決している。すっきりと心残りのない終わり方であるから。「神様２０１１」より、ずっと幸せで温かい思い出が「わたし」の中に残って終わった」

先の加藤（２００４）の言葉を援用すれば、学習者は「意味付け」を支持する者が多数派であるということになる。

一方、少数派ながら、「神様２０１１」を選ぶ者もいた。その理由としては、「大切な人と離れたくない。「神様２０１１」のような状況でも、一緒にいられるならそっちを選ぶ」のように、別れの辛さを回避したいことがあげられていた。

さらに、「同じ内容だけど一つの出来事で生活が一変してしまって考えさせられる話だから」というように、「あのこと」の意味を深く考えられることも理由としてあげられている。

先の四章（3）や前稿での検討からは、〈神様〉の内実を掘り下げていくためには、説明的な記述がある「草上の昼食」よりも、過酷な状況を強いる「神様２０１１」の方が、むしろ有効な起点となるのではないかと考えられる。

学習者には、「草上の昼食２０１１」を考えたいという意見もあった。そんな作品は、はたして成立するのか。その作品の中では「わたし」は何を祈ることになるのか。このような考察は、あまりに空想的に過ぎるかもしれない。しかし、学習者の〈神様〉や「あのこと」に対する認識をより鮮明にすると考えられる。

（二）『神様』を活用した読書単元

ア　『神様』の内容

馬場（２０１３）は、『神様』を「短編集全体が、「わたし」という一人の人物と、その周りに現れる様々な異種との関わりを描く一続きの物語である」[103]と指摘する。「異種」とは「人間ではない様々ないきものの総称」[124]である。

『神様』の9編には、異種だけでなく、「わたし」と親しく関わる

人々が登場する。本稿では、このような登場人物を「隣人」と呼ぶことにする。隣人は、「わたし」と同じ様に世間一般の人達とはややズレた面を持つ。異種を彷彿させるような不思議さも感じる。

後掲の表は、各作品に登場する異種と隣人を整理したものである。

イ　読書単元

『神様』を活用した読書単元としては、二つの案が考えられる。

一つは、「神様」「草上の昼食」と、それ以外の7編の関連性を追究するというものである。

たとえば、作品構造に着目すると、『神様』の収録作のほとんどは、「草上の昼食」と同様に、「わたし」の前から、異種・隣人が去って行くという共通性を持つ。この点は、「神様」「草上の昼食」の特性を考える着眼点となろう。

比較検討する作品を限定することも考えられる。「花野」は、その一つの候補になる。

この「花野」は、「わたし」と、幽霊になった叔父との交流を描いている。叔父から最後に一つ願いを叶えようと言われて、「わたし」は「最後の午餐」を希望する。叔父は、「わたし」に勧められて、そら豆を美味しく食べる。そして、「神っていうのは、その、いないこともないものなのかもしれんな」と言って姿を消す。

「花野」と「草上の昼食」には、この世で「わたし」だけが、熊や幽霊と隔たりの無い時間を過ごし、昼食（午餐）をして別れるという共通点がある。その他の設定は異なる。〈神（様）〉に対する認識にも差がある。両作品の比較を通して得られるものは多くあろう。

もう一つは、「草上の昼食」の冒頭の「ひさしぶりに／あいかわらず」は、「神様」から、どの程度の時間が経過しているのかを分析するというものである。

表に示したように、『神様』では、季節は、ほぼ順番通りに進行する。

「くま」が、人間社会への適応に勤しんでいる間、「わたし」も、異種や隣人と不思議な出来事を数多く体験していたと理解できる。（四章（四）で検討した「わたし」の変化も、「くま」との出会いだけでなく、これらの経験が原因だとも推測できる。）

「神様」の散歩は、「暑い季節」の一日だった。「草上の昼食」での再会は、最短では

表

作品名（掲載順）	異　種	隣　人	作品中の季節
神様	くま		夏
夏休み	3匹の小さなもの	原田さん	夏→夏の終わり
花野	幽霊になった叔父		秋
河童玉	河童	ウテナさん	〈記載無し〉
クリスマス	コスミスミコ（壺中の幽霊）	ウテナさん	冬・クリスマス
星の光は昔の光	コスミスミコ	えび男くん	暮れ・正月→一月半ば
春立つ	雪の季節だけ会える男	カナエさん	二月立春→四月春（桜）
離さない	人魚	エノモトさん	春（桜）→若葉の頃
草上の昼食	くま		春→夏

翌年の春ということになる。そう理解するのは、「くま」の変化（身体の成熟、自動車免許の取得、料理の上達等）から考えると短すぎるかもしれない。ただ、「わたし」と「くま」の関係が希薄になるほど年数が経ったとも思われない。

『神様』全体の時間進行は、「わたし」の人物像を外部から分析する重要な観点となるかもしれない。観点としての有効性を測るためには、『神様』は連作短編集と言われているが、本当に収録順に時間は進行しているのかという点を、先ず吟味する必要があろう。

（三）「神様」「神様２０１１」「山月記」による小説単元

清水（２０１６）は、「草上の昼食」の「くま」と「わたし」の別れの場面について「木霊のように重なる小説的記憶がある。中島敦の『山月記』のラストシーンである」229とし、次のように説く。

> こうしてくまは名前も住所も持たない「獣」に還り、「熊の神」に近づく。エイリアンとして緊張と努力を重ねて生きる生活から、彼はようやく解放された。その記憶と心さえ、やがて彼から消え果てるだろう。229
>
> この『山月記』における李徴の獣の咆哮は、異類に堕ちざるを得なかった自らの宿業を悲嘆する声である。しかし『神様』を締めくくるくまの咆哮は、エイリアンとしての人の世に生きることを断念した彼の無念の叫びであり、同時に獣に立ち返って生きなおす決意をこめた雄叫びでもある。230

「李徴」と「くま」には、原因は大きく異なるが、人間社会から不本意ながら離脱するという共通点が、指摘の通り確かに存する。

さらに、清水は、「袁參」や「わたし」の存在にも注目する。

> 袁參は健全な生活者の側から、「狼疾」ゆえに獣となった友の悲劇を、証人として眺めるほかない。231
>
> 彼女もまたヒトとして生きていた自己から「抜けて」きた存在である。しかし「わたし」は、そのままこの世界に留まりつづけるのだ。ヒトの姿をした「異類」であるのは、むしろ「わたし」のほうである。231

「神様」と「山月記」の作品内容には、かなりの相違がある。両者を直接結び付けるのは難しい。しかし、二作品の間に、「草上の昼食」を挟むことによって、興味深い小説単元の誕生が期待できる。「わたし」「くま」「李徴」「袁參」という四者を、どのように関係付けるか。その点に、これらの教材を読み合わせる大きな意味を見出すことができよう。

六　一年間の単元学習の振り返り

年度末・三月の③一年間の単元学習を振り返るという課題に対して、学習者達は、「コロナ禍に読むことで一層考えが深まった。きっと普通の生活の中で読んだだけでは、こんなに世界の変化が怖いとは思わなかったように思う」と、当時の日常生活の状況をふまえて

内省した上で、書くことに取り組んでいった。

失われた時間について、どうとらえていけば良いのか。学習者の多くは、「時間軸（過去・現在・未来）」をテーマとして意見をまとめていた（ⓐ・ⓑ）。

ⓐ各作品で「くま」と「わたし」の関係は置かれているまわりの環境によって、少しずつ変わっているところと変わらない所があると思った。環境が変わっても、変わってはいけない人との関係や、変えていかないといけないものもあるなと思った。そうやって変わっていってしまうようなものもあるから、今を大事にしないといけないと思った。未来を考えることや変えるということは、今や過去を見つめないといけないから、未来を変えることは、今通りすぎていく過去（今）を変えることになる。

コロナ禍の今も、そういう風に考えないといけない。

ⓑコロナで世の中が大きく変化した。高校生という、これから大人になるための大事な時期に、大切な時間・モノを奪われたと思った。しかし、こんなパンデミックがあっても立派な人間になったんだと思えるようになりたい。コロナのせいでと過去を後悔にするのではなく、コロナを乗りこえたと自信をもって言える過去にしたい。「神様」はいろんな見方ができて、読むのが難しかったけど、自分なりに考えを出すことができた。

学習者は、時間だけでなく、先のⓐの前半にもあるように、人と人との関係や出会いの意味についても考えていった（ⓒ）。

ⓒ私はこの一年、「くま」と「わたし」が出会った意味について考えた。「神様」の意味や「おめでとう」の人物を考えていく中で、作者はどのような気持ちで「くま」と「わたし」を出会わせたのだろうか。もうすぐ二年生も終わるが、今出会った人たちと出会えたことに感謝しようと思った。出会わなかったら起こらなかった事がすべてなのだと考えると、「出会った意味」について考えずにはいられない。

「神様」「神様２０１１」に加えて、下半期に「草上の昼食」「ありがとう」を読んだことによって、「時間」や「関係」についての学習者の認識はより深まったと考えられる。

このような思索の延長線上に、〈共生・共存・連帯〉というような見方も生まれている（ⓓ）。

ⓓ今生きている中で起こったことを細かく覚え続けることはできない。だから、過去がいつの間にか変わってしまい事実と異なることが伝えられていくかもしれない。そのようなことがないように一つ一つの出来事を手紙や詩などで書き表すことで形として残り真実を伝えていくことが大切だと伝えたかったのではないか。私たち人間は、何事も人間の視点から見てしまう。しかし他の生き物には、それぞれが待つ視点がある。だから他の視点から物事を見る大切さを伝えようとしているのではないか。

ⓓの前半は、単元学習を通して辿り着いた新たな認識内容をまと

めている。同じ様に、今回の学習を通して得た、自分の発見（世界観）を表した者も少なくない（ⓔ・ⓕ）。

ⓔ「神様」を読んだだけでは気づかなかったり考えなかったりしたことが、「神様２０１１」や「草上の昼食」「おめでとう」といった作品を通したことによって沢山見つかり面白いと感じた。自分なりに解釈していく中で、私自身の物事に対する捉え方も再認識できたように思う。どんな状況でも、どんな世界でも変わるものも変わらないものもあるのだと感じた。何があっても確かに時間は流れるし生物も存在していくから、嘆くでも悲しむでもなく、その変化も今も大切にできたら良いのではないかと思う。

ⓕ一年間「神様」を読んで感じたことは、人間は多様な考えを人それぞれが持っているということだ。同じ文を読んでいるのに、同じ人間なのに、意見は異なる。となると、世界でまだ紛争が続く理由が分かる気がする。人は皆、自分の考えで正義をもって戦っている。自分が正しい、自分たちが正しいと思い込むだけでなく、考え方・とらえ方は多様だからここまで人類は進化してきた。このことを胸にきざむ今。

七　終わりに

本稿では、「草上の昼食」の教材性の検討を行った。その特質を具体的に指摘した。さらに、複数の単元編成案を構想し、「草上の昼食」と他の教材と読み合わせることによって、有益な学習が可能であることを明らかにできたかと思われる。

今回の検討に当たっても、前稿と同様に、ワークシートに記された学習者の読み取り内容を研究資料とした。

下半期は、上半期以上に時間的な制約が厳しかった。そのため、教材を時間をかけて読み返すことや、先行研究を教材化することについては、十分な時間をかけることができなかった。

しかしながら、今回記述内容を精査することによって、学習者の読み手としての成長を確認することができた。数値化して伸長度を測るのは困難ながら、学習者達は、上半期の経験を活かし、協同しながら読む・考える・書く活動を質高く行うことができていた。

石井（２０２１）は、対話的な学びの特徴について次のように述べている。

「対話」は互恵的学びを生み出す。さまざまな状況のさまざまな考えを突き合わせ、真摯にしかし柔軟に、ともによりよい学びを目指して向かい合って行うのが「対話」である。そのとき、その言葉の往来によって、対話に参加した各人にこれまでには気付きや感慨や喜びをもたらすことがある。それが互恵的学びであり、もっとも理想的な「対話」だと言える。[174]

研究資料のワークシート以上に、教室の中で耳にした対話の中では、さらに鋭敏な読みが語り合われていた。

作品の細部の読みが、次の読み深めへと繋がっていく。また、六

章で紹介した「まとめ」の内容を共有することが、次の着想を生む。そのような学びの場を生み出せるような単元の創造に今後も取り組みたい。

参考（引用）文献

加藤典洋（２００４）「ｉ　九〇年代小説の新しさ川上弘美『センセイの鞄』」『小説の未来』朝日新聞社　62～71

吉岡撤（２００５）「川上弘美『神様』・『草上の昼食』の授業」「月刊国語教育」２００５年２月号（リレー連載　自主編成とその教材の検討31）東京法令出版　74～75

岸睦子（２００５）「「神様」と「草上の昼食」そして「海馬」へ―〈くま〉と〈わたし〉の勘違い―」『現代女性作家読本①　川上弘美』鼎書房　46～49

荒木奈美（２０１１）「川上弘美「神様」「草上の昼食論」―「くま」の生きづらさを通して見えてくるもの―」「札幌大学総合論叢」第32号　216～232

馬場真美子（２０１３）「川上弘美「離さない」―安部公房「人魚伝」との比較を中心に」「立教大学大学院日本文学論叢」13号立教大学大学院文学研究科日本文学専攻編　103～125

清水良典（２０１６）「７章　くまと「わたし」の分際」『デビュー小説論―新時代を創った作家たち』講談社　202～234

大原祐治（２０１６）「動物・ことば・時間―〈動物と人間の文学誌〉のための覚え書き」「千葉大学人文社会科学研究」32号　1～12

渡邉久暢（２０１７）「渡邉久暢のＢｌｏｇ」２０１７年10月28日。「川上弘美『神様』より、「神様」「草上の昼食」を取り上げて教材化しています。」http://hisanobuwatanabe.cocolog-nifty.com/blog/2017/10/post-82ad.html

玉木雅己（２０２１）「自己と他者の読みを重ね合う小説教材単元の実践的研究―「神様」「神様２０１１」を読み返す授業―」「国語教育研究」第62号　広島大学国語教育会　38～50

石井順治（２０２１）『子どもの読みがつくる文学の授業　コロナ禍をこえる「学び合う学び」』明石書店

北村紗衣（２０２１）『批評の教室―チョウのように読み、ハチのように書く』（ちくま新書）筑摩書房

（広島県立賀茂高等学校全日制）